

1節. 「心を騒がせるな。神を信じなさい。そして、わたしをも信じなさい。」

最後の晩餐の席。弟子たちに向けての主イエスの別れの説教が続く。ここでは、「わたしの行く所に、あなたは今ついて来ることはできないが、後でついてくることになる」とか、「あなたは三度わたしのことを知らないと言うだろう」と主イエスに言われたペトロはじめ弟子たちの心が乱されないように勇気づける。「心を騒がせる」は、11:33、12:27、13:21、14:1、27 に用いられていて、ラザロの死に関する11章33節以外は、12章27節と13章21節が主イエスの死に関わり、14章1節と27節は主イエスの死による別れに直面する弟子たちにかかわる。

「14章1節と27節はイエスの死による別離に直面する弟子たちにかかわる。死という語は出ないが、このことの別れに直面して、心が乱れるのは当然のこととして前提されている。14章1と27節が弟子に関わる。とにかく誰でも心が乱れるのである。すなわち心が乱れてはいけない、という倫理的な話ではない。心が乱れない方がおかしいのである。すなわち心が乱れないなどと言っている人たちのための言葉ではない。弱い者であると言っている人たちへの言葉である。それを認めている人たち、その状態へ落ち入っている人たちへの呼びかけである。その上で、それを以下の別れの言葉によって、克服しなさいという呼びかけである。心の騒いでいるところへ以下の呼びかけが響くのである。「さあ、立て。ここから出かけよう」（14:31）という呼びかけが響くのである：ヘブライ11:3参照（「信仰によって、わたしたちは、この世界が神の言葉によって創造され、従って見えるものは、目に見えているものからできたのではないことが分かるのです。」）」（伊吹）

主イエスは肉体をもってこの世におられたときは喜怒哀楽のはっきりと示した方である。ご自身が去って行くことに伴う弟子たちの心の動揺を主イエスは知っておられる。その心の乱れは自制し努力して落ち着かせるのではなく、神を信じ、主イエスを信じるによってのみ与えられる。克服できる。だから主イエスは、「神を信じなさい。そして、わたしをも信じなさい」と言われる。主イエスが去って行くことから来る心の恐れや動揺、乱れは、「信じる」ことによってのみ克服できる。

神を信じるその信仰で主イエスを信じる。このような順番は、ヨハネによる福音書ではここだけ。通常は、主イエスを信じ、それにより主イエスの父である神を信じる順である。

2節. 「わたしの父の家には住む所がたくさんある。もしなければ、あなたがたのために場所を用意しに行くと言ったであろうか。」

「わたしの父の家には住む所がたくさんある」という言葉は1節の関連で読まなければならない。「住む所」と訳されている言葉は「モネー (μονη)」で、新約聖書の中ではこここの先の23節の2回しか使われていない。23節では「わたしを愛する人は、わたしの言

葉を守る。わたしの父はその人を愛され、父とわたしとはその人のところに行き、一緒に住む」と「住む」と訳されている。

主イエスは、御自身が去ることによって、主イエスのもとにいるという居場所（モネー）がなくなってしまうことから心を騒がせている弟子たちに、そういうことであれば前から言っておいたであろう、と言われている。

「モネーという言葉は、『止まる』（メネイン）から来る。そこでモネーをメネインする所として読む必要がある。メネインはヨハネ福音書で多くであるので、6章56節と14章と15章に限定して調べてみる。住居を得るということは、止まることができるという意味である。」（伊吹）

「わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者は、いつもわたしの内におり、わたしもまたいつもその人のうちにいる」（6:56）。「内におり」と訳されている言葉（メノー）。

「わたしにつながっていなさい。わたしもあなたがたにつながっている。ぶどうの枝が、木につながってなければ、自分では実を結ぶことができないように、あなたがたも、わたしにつながってなければ、実を結ぶことができない。わたしはぶどうの木、あなたがたはその枝である。人がわたしにつながっており、わたしもその人につながっていれば、その人は豊かな実を結ぶ。わたしを離れては、あなたがたは何もできないからである。」（15:4—5）。「つながっており」と訳されている言葉（メノー）

「それは弟子たちのことであるから、弟子たちに限定して調べてみる。第一にここで聖霊の来臨が前提されて話されていることに注意を向ける必要がある。そして止まるという居住は、14章17節で聖霊が弟子たちのうちにいるということで、それは聖霊が開く次元に弟子たちが止まるということである。……。15章ではイエスは真のぶどうの木であり、弟子たちはその木に止まるのである（15:4, 5）、。15:6—7では『わたしのうちに止まる』と言われており、15:9—10では『わたしの愛のうちに止まれ』、ないし『止まる』と言われている。すなわち多くの住居というのは、聖霊のことであり、また栄光化されたイエスの霊における現前のことであり、あるいはそこで明らかになるイエスの愛のことである。すなわち多くの住居とは、イエスと共にその去るイエスに従わず地上に残されていても、地上にこのような住居を作るためにイエスは行くのである。しかしここに天上の住居が共に考えられていることはもちろんのことであろう。今イエスに従わなくても心を騒がすなということである。『そうでなければ』（新共同訳では「もしなければ」）ということとは現実に反することである。それは去っても聖霊を送ることがなく、14章18節で否定される孤児として残すということである。14:23には「住居を作るであろう」（新共同訳「一緒に住む」

【NKJV】 We will come to him and make Our home with him.）と言われており、ここで14:2の住居が地上に、しかも父とともに住むこととして実現することが明らかになる。こう見てくると、イエスの行くことは、まさに場所を準備することなのである。住居は天上にも地上にも準備されるのである。『たくさん住居』（新共同訳「住む所がたくさんある」）という意味で、6:56の聖餐によるイエスとの相互内在の住居の場所も考えられてい

るのであろう。14:23によれば愛がこの住居を可能にしているのである。そしてそれらの住居のすべてが、父の家と呼ばれている。」（伊吹）

3節。「行ってあなたがたのために場所を用意したら、戻って来て、あなたがたをわたしのもとに迎える。こうして、わたしのいる所に、あなたがたもいることになる。」

「場所」（τόπος、トポス）。「それは父のもとにある場所であるが、天上だけの場所ではない（14:23）。『再び来て、あなたたちをわたしのもとに迎え入れる』は、ヨハネ福音書の中でも最も重要な言葉の一つである。この『来る（エルコマイ）』は14:18で『あなた方のもとに来る』（新共同訳「あなたがたのところに戻ってくる」）によって明確化される。別離において問題とされるのはいわゆる仏教でいう『往相』^{おうそう}と言われるものであろうが、それは霊において再び来るためである。『わたしのもとへ迎え入れる』は、最終的には天上の父のもとへの意味であるが、霊において地上に来る、いわゆる「環相」^{げんそう}と呼ばれることが、ヨハネ福音書の全体の叙述、すなわちこの福音書を、そしてヨハネ神学を可能にしているのである。したがって世でいう「お迎えが来る」というのは救いを含んだ言葉である。すなわち地上のイエスは『行く（父のもとへ去る）ために来る』イエスなのであるが、そのイエスは『（霊において）来るために去る』イエスなのである。つまりこの統一がヨハネ福音書のイエスなのであり、そのことがここで決定的な仕方で明らかにされる。この意味でのイエスの来臨は、ここでは遠い未来の終末のことではない。ここに14:1の「心を騒がせるな」という言葉の根拠があるのである。そうでなければ心を騒がせるのは当然のことであって、打ち勝つすべはないことになる。「わたしのいるところにあなたたちもいるためである」、すなわちすべては共にいることなのである。ここでは十字架の苦難が別離の苦難となっているが、それはこのように打ち勝たれる。「そしてわたしのいるところに」は、12:26に全く同じ句が話されている。それは彼岸のことだけではないのである。この永遠に共にあることが救いの目的なのである。そしてここでは霊における現在終末論の再臨が考えられており、そして先ず第一にイエスの死と復活に関わる。イエスの成し遂げられた派遣の結果は彼の現在なのである。」（伊吹）